



「越境作家」に関する言語横断的研究ーリービ英雄を中心にー

BROOK THOMAS

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2022-03-25

(Date of Publication)

2026-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8219号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1008219>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論 文 内 容 の 要 旨

論 文 題 目

「越境作家」に関する言語横断的研究
—リービ英雄を中心に—

氏 名 : BROOK THOMAS

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名 (主) 大橋完太郎 准教授
(副) 長坂一郎 教授
(副) 梶尾文武 准教授

論文内容の要旨

氏名：BROOK THOMAS

論文題目：「越境作家」に関する言語横断的研究

—リービ英雄を中心に—

1990 年前後より、「越境」という用語が日本の文学批評と文学研究に定着していった。「越境」あるいは「越境作家」は作者の母語と執筆言語における不一致を第一の特徴として、主に成人してから日本に渡り、日本語で創作活動を行う作家に対し用いられてきた。本研究ではそうした批評的・学術的言説を視野に入れた上で、「越境作家」の先駆者かつ体现者と見なされてきたリービ英雄（1950-）の執筆活動と作家人生を中心に、「越境作家」に関わる諸問題をめぐり検討と考察を行っている。

「言語横断的研究」とは複数の固有言語に跨った事象を対象としつつ、「言語を横断する」とはいかなることかに対し意識を向けるという、本研究の基本的アプローチを指している。本論文に収録している各章の大部分はこうしたアプローチを積極的に意図している。論文全体の構成は以下に詳述するとおり、「越境作家群」を広く考察する第一部「越境作家群」をめぐる言語横断的研究」とリービ英雄に焦点を当てた第二部「リービ英雄の文学と作家人生における二つの転機」からなっている。「越境作家群」とは、リービが水村美苗（生年不詳）との対談で用いた表現であり、本研究では、先行研究においても頻繁に並列されてきたリービ英雄、水村美苗、多和田葉子（1960-）という三人の作家を念頭において使用している。

まず、序章「越境作家」を研究する私——言語横断的研究と当事者性の問題——では、本研究の背景にある問題意識を示した上で、「越境作家」における独特な文学的志向性とその特徴について考察している。2011 年に初めての本格的なリービ英雄論が笹沼俊暁により著されたが、それは台湾での日本語教育に従事している書き手の〈私〉を強く打ち出した批評の体裁を取ったところに特色があった。書き手の〈私〉の前景化は、実は「越境作家」をめぐる批評的・学術的言説を広く特徴づけるものである。序章の前半では、この特徴がリービの文章によって触発されているという指摘を踏まえて、「越境作家」を対象とした文学研究における〈私〉の前景化の理由と意義について考察している。その主な理由としては、「越境作家」の文学作品および作家活動が作者の執筆言語に対する距離を際立たせる傾向があるため、そうした文学を扱う論者にとって、客観的叙述の条件である書き手の言語運用能力の自明性（学習過程の忘却）が揺さぶりを受けると考えられる。一方、リービ英雄の一読者・一研究者としての本論文の筆者自身が、先行研究における〈私〉の前景化という問題を完全に客体化して論じることにも限界がある。従って、序章では研究を行う上で日本語と英語をはじめとする複数の言語を横断せざるを得なかった体験について具体的に記述し、その記述を通じて議論の深化を試みた。

ところが、小森陽一が指摘しているように、「言語を横断する」という概念自体も問題含みである。特定の言語・文化を完全に超越した形で、それぞれの言語・文化を「横断する」という行為を想定することは現実的に不可能である。しかし、「越境作家」はそのような行為を行う存在として捉えられてきたのであり、また作家自身もそうした表象の生成に関与してきた。序章の後半では、「越境」の普遍化を試みた先行論（宮田文久、井口時男）を参照しつつ、リ

ービと多和田による「越境」をめぐる発言をもとに、文化（言語）間の移動・葛藤を昇華させた文学作品を志す「越境作家」像を提示する。また、こうした文学的運動における（１）「幻想文学」（トドロフ）との連続性（２）言語中心であるという特徴（３）〈私〉および〈個〉の問題との関係性について詳述する。

序章を経て、第一部の他の章では続けて「越境作家」ないし「越境文学」（「越境作家」による文学作品）全般に関わる問題を、具体的な事例を通じて検討する。第一章「水村美苗における「文学の真理」と「小説が持ちうる「真実の力」——作品の英訳を通して考える——」では、物議を醸した水村の『日本語が亡びるとき——英語の世紀の中で』（2008年）とその英訳（*The Fall of Language in the Age of English*, 2015）を中心に、作家像の演出・創出が作品の内容および作品に対する理解（読者による作品受容）と結んでいる関係について検討している。第二章「「私たち（の）を分断する壁」——リービ英雄とカズオ・イシグロにおける言語・文化的帰属性と翻訳の問題——」では、英語日本語間の翻訳に関わる問題に配慮しつつ、「越境作家」における文化的・言語的帰属意識を主な対象としている。

『續明暗』（1990年）と『私小説 from left to right』（1995年）、『本格小説』（2002年）といった作品を通じて、「日本近代文学」の人工的な構築性を暴き、日本語の「外在性」を可視化したとして水村美苗の文学的業績は高く評価されてきた。ところが、日本語の行く末を憂い、国家による言語保護の必要性を唱えた『日本語が亡びるとき』を契機に水村に対する評価が一変し、「日本語ナショナリズム」への急展開が批判された。しかし、そうした主張を行っている水村が自らの作品の英訳に多大の労力と時間を注いでいると思われることは、彼女の作家活動全般に対する評価を難しくさせている。第一章ではこの問題を念頭に、『日本語が亡びるとき』における議論を解きほぐし、同書と『本格小説』を、それらの英訳（英語版）と比較検討することにより、議論の新たな展開を試みる。

カズオ・イシグロ（1954-）は必ずしも狭義の「越境作家群」に数えられる作家ではないが、上記の作家と同世代に当たり、また問題意識を広く共有していると考えられる。第二章では、2017年にノーベル文学賞を受賞した際にイシグロが用いた表現“our dividing walls”（既刊の日本語訳では「私たちを分断する壁」）に着目し、英日翻訳における所有格・所有代名詞の欠落という一般的な問題に留意しつつ、イシグロとリービにおける「壁」と「塀」の表象を検討する。本章では、リービが作家デビュー当初に述べたイシグロ観を参照しつつ、「塀の外で」（1999年）をはじめとするリービのエッセイや作品、そして壁の崩壊を象徴的に描いたイシグロの『わたしたちが孤児だったころ』（*When We Were Orphans*, 2000）の分析を通じて、作家と、その作家が文学作品の創作に携わる上で育む固有言語（による文学の伝統）との相互依存関係をめぐる両作家の強い関心を明らかにする。

以上の、「越境作家」全般に関わる問題を考察した第一部を経て、第二部ではより具体的にリービ英雄の文学と作家人生に関わる問題を検討している。従来のリービ英雄研究は二つの転機に注目してきた。一つ目はリービが万葉集英訳者・日本文学研究者から「日本語の作家」へと転身＝変身を遂げた転機である。二つ目は、リービの作品が「「日本」という記号へ向かう文化求心力」を主題としたものから、「次第にその単一的な純粹さから離れ、多元的、分散的なものに惹かれていく様子を表現」するに至った（フェイ・ユエン・クリーマン）という、より漸次的な変化である。しかし、どちらの転機も十分に検討されてこなかった。第三、四章で

はリービの万葉集研究の内実を明らかにし、またその作業を通じて後の創作活動との連続性に光を当て、考察を行う。第五章では、リービが作家デビューを遂げて10数年後の作品である「ヘンリーたけしレウィツキーの夏の紀行」(2002年)に対する作品分析を踏まえて、同作を後者の転機を標づける作品として解釈する。

まず、第三章「リービ英雄の万葉集英訳と研究——『人麻呂と日本の抒情性の誕生』解題と考察を中心に——」では、作者自身の回想と先行論の両方に見られる断絶のナラティブを再考すべく、リービの万葉集研究の内実とそれが後の創作と有している連続性を詳しく検討する。リービの英訳万葉集の主な特徴は視覚性の重視である。歌の作者が実際に見ている風景だけでなく、枕詞をはじめとする抽象的なイメージ(例:「村肝の」)まで鮮やかに描写されているが、この特徴は、ある風景を見て、言葉に思いを託す抒情的詩人像の投影と深く連続している。このように、創作的意図を持った「詩人」を想定する形で万葉集を読む姿勢は、1978年に提出され、1984年に単行本化された博士論文“Hitomaro and the Birth of Japanese Lyricism”にも確認できる。本章では、同書に対する学界の評価を紹介しつつ、その中心的な議論が1950年代以降に日本で提唱されていた「抒情詩の発生」(西郷信綱)から大きな示唆を得たと思われることやそうした成立事情の意味について詳述している。

第四章「リービ英雄の研究者時代における二言語併用——「抒情」‘lyric’という語の登場をめぐる考察——」では、「日本語でものを書く作家」になる前にリービが日本語による論述行為を行っていたという事実に着目し、作家になる前の研究者としての二言語併用の経験と後の作家としての姿勢との関係性について考察する。博士論文の提出より2年前の1976年に、リービは日本語による論文「「比喩の歴史」と人麿の挽歌」を中西進による編著書に収録した。興味深いことに、後のキーワードとなる「抒情」はこの論文に見当たらない。それに関わらず、1976年の論文と2年後の1978年に提出された博士論文では、議論の展開それ自体はほとんど同じである。本章では、「抒情」‘lyric’という語がリービの万葉集関連叙述に登場する過程を明らかにした上で、リービがその後、作家として、日本語という「この言葉の表現者」であると主張している背景を探る。特に、「かける」という語に関するリービの独特な解釈に着目し、作家デビュー以前のこうした日本語による論述行為から、言葉の共有者としての作家像の原像を見出す。

最後の第五章「翻訳される「アイデンティティーズ」——「ヘンリーたけしレウィツキーの夏の紀行」論——」では、「翻訳」と「アイデンティティ」なるものとの関係性が主題化されている同作の作品分析を通じて、リービが「日本語(の)作家」として書くこと、および「日本語(の)作家になった」者として自らの存在をどのように捉えてきたかという問題を検討し、考察している。従来の「越境作家」をめぐる研究は、母語ではない言語を執筆言語として選択する上での作者の自由意志の行使を重視してきた。しかし、リービ自身は自らの作家としての姿勢あるいはアイデンティティについて語る際、「なる」という動詞を軸とした、能動と受動の枠組みには容易に収まらない理解を示してきた。また、リービはデビュー当初には、「日本(語)の作家」としての「アイデンティティ」を主張している場合もあれば、自らの「アイデンティティーズ」の複数性を強調している場合もあり、その主張は一貫性を欠いている。それに対し本章では、作品において描かれる「翻訳」と「アイデンティティ」との関係性を検討し、作品分析を通じて次の結論を導き出す。(言語的)アイデンティティを保つには、「翻訳をする」

能力を保持しなければならず、それを放棄してしまえば自ら固有の意志を発揮する能力も失ってしまい、かえって「翻訳される」＝翻弄されることを強いられてしまう。作品からリービにおけるこうした認識を読み取り、リービの創作を日本語へ「翻訳をする」行為として捉え、またそれと関連して、日本語（の固有性ないし歴史的規範性）への依存＝従属を少なくとも暫定的に肯定した作家像を提示する。さらに、そのような従属性への自覚こそが、先行論で指摘されてきた、後の創作に見られる複数性志向の前提条件であるという見解を示す。